日本手話を母語とする乳幼児・児童に対する新版Ｋ式発達検査の実施に関する提案

手話言語を獲得して育つ聴覚障害児の発達を評価するために

〇河﨑佳子　　中尾恵弥子　　物井明子　　久保沢寛
（神戸大学大学院）　（特定非営利活動法人 手話言語獲得習得支援研究機構）

KEY WORDS: 聴覚障害児　新版Ｋ式発達検査　日本手話

【目的】

「新版 K 式発達検査」は,京都市児童院（現京都市児童福祉センター）を中心として開発され,1980 年に公刊された。「姿勢・運動 P-M」「認知・適応 C-A」「言語・社会 L-S」の 3 領域から構成される。「新版 K 式発達検査 2001」はその改訂版で,新生児から成人までを対象に,延べ 328 の検査項目から成る。一般的な発達検査同様,健聴児を対象として日本語で実施するよう作られているため,日本手話を母語とする子どもに実施するには,検討が必要である。本研究では,日本手話を獲得して育つきこえない子どもたちの発達を「新版K式発達検査 2001」を用いて測定するために,課題の内容と実施方法について検討した。その結果を報告し,「新版K式発達検査 2001」の日本手話での実施に関する提案を行う。なお,今回は形式的思考に至るまでの段階に焦点を絞り,10 歳までの課題について検討することとした。

【方法】

0:0~10:0 の検査項目について，課題の内容や検査方法が日本手話を母語として育つ子どもの発達を測るのに適するかどうかを検討した。教示文や課題文の日本手話翻訳,ならびに表現方法の提案については,ネイティブサイナー（日本手話を母語とするろう者）と,日本語話者であり心理学を専門とする研究者らで協議した。

【結果】

検討の結果，①日本語の教示文をそのまま日本手話に翻訳すれば施行可能な項目 ②その項目が測ろうとする内容を捉えて,教示の日本手話翻訳や表現を工夫しなければならない項目 ③日本語や音で作られている課題の内容を,日本手話や聴覚以外の刺激で実施するための検討が必要な項目 ④日本手話で実施するには該当しない,もしくはそぐわないため,さらに検討が必要な項目 の４つに分類することができた（表１参照）。

表１　検査項目の分類

分類	検査項目
①	②③④以外の項目
②	P49・52「小鈴と瓶」,P72～75「はめ板」,P87「重さの比較（5 個のおもり）」 ,V13「数の理解（４つの積み木）」,V14・15「数の理解（13 の丸）」
③	V1「数の記憶（2 数復唱）」,V6「文の記憶（短文復唱Ⅰ）」 ,V7「文の記憶（短文復唱Ⅱ）」,V24「数の理解（打数かぞえ）」
④	V10b・10c「表情理解Ⅰ・Ⅱ」,V11・12「左右の弁別」, V27「身体の名称」,V31b「用途の絵指示」

次に,②③④に分類した項目について,検討した内容を例示して述べる。(以下「 」は日本語,[　]は日本手話を示す。)

②について

P49・P52「小鈴と瓶」の「入れてごらんなさい」「出してごらんなさい」という教示文については, [入れる][出す]を日本手話で表現すると具体的な動作を誘導してしまうことから,[入れる][出す]は使わず,それぞれ,（瓶の口を指差して）[鈴を/お願い],（鈴の入った瓶を指差して）[鈴を/ちょうだい]と伝えることにした。P72「はめ板」の教示（円孔の前に円板を置いて）「ここに/はめてごらん」についても,［はめる]の手話が具体的な動作を誘導することから,[ここに/お願い]とした。V13「数の理解（４つの積木）」の教示「ここに積木があります。いくつあるか指をあてて,大きな声で数えてごらんなさい」は,[ここに積み木があります。いくつあるかな。積木に指をあてて数えてください]と手話で教示することにした。

③について

V1「数の記憶（2 数復唱）」における「5・8」などの数字の手話は,当該基準年齢 2:0 超～2:3 歳の幼児の手指の動きとしては難しいため,この年齢の子どもに可能な手形（グー・パーなど）に置き換えて実施することとした。V6「文の記憶（短文復唱Ⅰ）」に関しては,日本語文と同数の自立語が含まれるよう留意し,たとえば,「犬は/よく/走ります」であれば,[犬は/走り/回ります]の日本手話に翻訳した。また,V24「数の理解（打数かぞえ）」では,検査者が被検児に見えないように机を叩く音の回数を問う方法を,検査者が被検児の前で手を開閉する（グーからパーに一瞬で開く）動作を示して,その回数を問う方法に変更した。

④について

V10b・10c「比較（表情理解Ⅰ・Ⅱ）」について,「泣く」「笑う」などの単語を日本手話で表わす場合,手話の動きと表情は必ず対になっているので,[泣いている顔はどれですか] のような質問自体が解答のヒントになる。同様に,V11・12「左右の弁別」や V27「身体の名称（身体各部）」に関しても,「あなたの左の手はどれですか」や「あなたの目はどれですか」を日本手話で質問すると,検査者は自身の左ひじを外側に動かす動作で[左]と伝えたり,自身の目を指差して[目]と伝えたりするため,やはり解答のヒントとなる。また, V31b「指示（用途の絵指示）」については,たとえば,「すわるものはどれですか」という問いの場合,日本手話では,絵の名称である[椅子]とその用途である[すわる]の手話が非常に近いため,用途を告げることで解答の絵を指示できるか否かを調べる検査としては成り立ちにくい。このように,④に分類された項目の内容や実施方法については,今後も検討が必要である。

【展望】

本研究は，特定非営利活動法人 手話言語獲得習得支援研究機構（NPO こめっこ）が主体となって実施する「手話言語を獲得・習得する子どもの力研究プロジェクト」（日本財団助成）の一貫として行ったものである。今後は,今回提案した方法で,同法人が実施する乳幼児期手話言語獲得習得支援事業* に参加する日本手話母語児らを対象に「新版 K 式発達検査 2001」を実施し,検討を深めていきたい。

（参考文献）

生澤雅夫・松下裕・中瀬惇編著（2002）『新版 K 式発達検査 2001 実施手引書』京都国際社会福祉センター

＊NPO こめっこ HP　https://www.comekko.com

(KAWASAKI Yoshiko, NAKAO Emiko, MONOI Akiko, KUBOSAWA Yutaka)

聴覚障害乳幼児と養育者に手話言語習得を保障する支援（1）

－手話のあふれる早期支援「こめっこ」の臨床心理学的意義－

○河﨑佳子（神戸大学大学院）　中尾恵弥子　物井明子（NPO こめっこ）

目的

大阪府手話言語条例（2017 年施行）の施策として始まった,乳幼児期手話言語獲得支援事業「こめっこ」（日本財団助成）について,企画に至る背景,活動の目的と内容を臨床心理学的視点から論じる。

「こめっこ」企画にいたる背景

発表者は臨床心理士として長年,聴覚障害者の心理的支援に携わってきた（河﨑 2004,2008,2015）。その過程で,手話を遠ざけられて育った聴覚障害者が心理的,発達的に被った不利益,愛着形成にまつわる課題,対人関係上の困難,青年期以降のアイデンティティ混乱などを目の当たりにした。戦前からつづく口話重視の教育の影響で,彼らは幼少期に手話に接することができず,口話法による日本語習得を強いられた。聴覚障害児の９割は健聴家族に誕生する。健聴の親やきょうだいが音声で自由に会話する中で,彼らは容易には想像できない孤独を味わい,対等なコミュニケーションを知らず,きこえない自分の将来を描くこともできなかった。

言語としての手話（sign language）は,音声日本語に対応させながら示す視覚的補助ツールとしての手話（sign）とは異なり,ろう者が共に生きる過程で生まれた,独自の文法をもつ完全言語である。国や地域によって異なり,方言も存在する。そして,音声言語と同じように,まわりに手話言語があれば,赤ちゃんはそれを獲得していく。健聴者にとって息をするようにきこえてくる音声言語（日本語）と同様,息をするように目にとびこんでくる映像言語（日本手話）を,赤ちゃんは自然に自分のことばにできるのである。

手話言語から遠ざけられて育った聴覚障害者の経験を知る中で,新生児聴覚スクリーニング検査で聴覚障害の可能性が告げられた直後から,赤ちゃんと保護者が手話に触れ,ネイティブサイナー（手話言語を母語とする人）に会える早期支援が重要であると考えた。

「こめっこ」活動の目的と意味

○ 保護者の心を支援する。

不安のない心で赤ちゃんの目を見つめ,わが子のありのままを愛おしく包み込むために,手話は保護者に「かかわれる自信」をもたらす。そして,青年や成人ろう者との出会いは,保護者が子どもの将来像を描く助けとなる。聴覚障害に詳しい臨床心理士や手話通訳スタッフは,常に保護者のことばに耳を傾けて寄り添う。他職種連携の姿勢から,幅広い情報の提供とネットワーク支援を目指す。

○ 子どもたちの手話言語の獲得を支援する。

手話言語のあふれる環境で,乳幼児は遊びをとおして自然に手話を習得していく。見てわかることばで知識を吸収し,人とかかわる力を育み,思考力を高めていく。

○ 保護者の手話学習を支援する。

楽しめる話題と教材を工夫し,育児に活かせる手話表現を、子どもとのやりとりを想定して学ぶ。親子間のコミュニケーションが活性化することでエピソードが生まれ,良好な愛着関係が育まれる。

○ 出会いとアイデンティティ形成

「こめっこ」には,幅広い年齢層のろうスタッフ,ろう親のもとに育った聴スタッフ（CODA）がいる。ロールモデルとなる先輩,手話をもって生きるさまざまな人々との出会いが,子どもたちのアイデンティティ形成の支えとなる。

「こめっこ」活動の概要

主な対象は,聴覚障害のある未就学児とその家族である。日本手話から生まれた表現遊び「手話ぱんぱん」（手話言語のプロソディが詰まった作品）,オリジナル体操,手話での絵本よみ,手話劇等を、親子で一緒に楽しむ。子どもは自然に手話を習得し,ろうスタッフとのやりとりをとおして手話力を磨きながら,わかる・つたえられる自分,ルールやプロセスを理解できる自分を実感する。一方,保護者にとっては,そうした子どもの姿を見て,成長を確認する機会となる。また,前述の手話学習,保護者交流,情報交換の時間を設け,子どもの発達やかかわりについての相談にも応じている。

考察

事業開始から５年間が経ち,０～３歳から「こめっこ」に通う子どもたちが,安定した親子関係の中で,日本手話を獲得しながら,人とのかかわりを楽しみ,積極的に探索し,情緒豊かに成長している。工夫を重ね,児童期以降の成長も見守っていきたい。

参考文献

河﨑佳子（2004）きこえない子の心・ことば・家族,明石書店

村瀬嘉代子・河﨑佳子（2008）　聴覚障害者の心理臨床②,日本評論社

河﨑佳子（2015）　手話とろう者 ～家族・教育～,手話・言語コミュニケーション②　文理閣

キーワード,早期支援・手話・聴覚障害

聴覚障害乳幼児と養育者に手話言語習得を保障する支援（2）

－手話のあふれる早期支援「こめっこ」参加児の事例－

○中尾恵弥子　物井明子（NPO こめっこ）　河﨑佳子（神戸大学大学院）

目的

本発表では,手話言語（日本手話）とろう者に出会える場「こめっこ」*の活動に継続参加し,順調な発達を示している２児について,活動中の観察,保護者からの聴き取り,発達検査の情報をもとに,成長の経過を素描し,聴覚障害乳幼児の早期支援における手話環境保障の意義を,親子の関係形成に焦点をあてて検討する。

事例

【A 児】　1 歳半健診にて発語の遅れから聴覚障害が疑われ,重度難聴（100ｄB）と診断された。さまざまな情報に触れる中で,A に手話環境を与えたいと考えた両親は,A が 1 歳 9 か月の時に「こめっこ」を訪れた。当時の A は,周囲の様子に鋭い注意を向け,目から入ってくる情報をできるだけキャッチしようと動いていた。その姿には「野生児」を連想させる迫力があった。１歳迎えるまで,両親は不安なくAを養育し,視線や表情,指さし等でかなり意思疎通ができていたという。しかし,１歳をすぎて自己主張がはっきりしてきた頃から,A は自分の思いが伝わらないもどかしさで,癇癪や噛む行為が増え,一方で母も言葉がけがAに届かないことを懸念し,親子の関係に難しさを覚え始めていた。「こめっこ」の活動に参加し始めたＡは,ろうスタッフと遊びながら手話を吸収し,2 歳の誕生日を迎える頃には「食べる」「飲む」などを手話で伝えるようになった。両親も手話習得に熱心だった。2歳1か月で両耳人工内耳手術を受けた。2歳3か月にはスタッフと手話でやりとりしながらおままごと遊びを楽しみ,手話の表現遊びを自らやって見せ,他児に「おうちに帰るよ」と手話で話しかけるなどの様子が見られた。スタッフの手話ネームを覚えて「この人は○○」「あの人は△△」と伝えるのに加え,「わたしはＡ」と自分の手話ネームを示したのもこの時期である。2 歳半からの 3 か月間は,コロナウイルス感染対策で対面活動が休止したため,A と両親は自宅で毎日「こめっこ」の動画配信*を視聴していた。A は爆発的に手話を吸収し,手話ぱんぱん*をアレンジして表現したり,食卓で父母を相手に「こめっこごっこ」を展開したりした。そして,手話で意味（物の名前や文脈理解）を蓄えてきたAは,聴覚活用による日本語（口話）力も急激に伸ばしていった。3 歳 8 か月でろう学校幼稚部に入学し,日本語と手話言語を並行して習得している。4 歳半を迎え,就寝前などに人工内耳を外した時は両親の手話をよみ,両親の音声会話を理解したい時には,自ら「手話して」と父母に要求できる子どもに成長している。

新版Ｋ式　P－M：103　C－A：106　L－S：111　全検査：108

【B 児】　新生児スクリーニング検査でリファー（要精密検査）となり,母が不安でいっぱいな時に SNS で出会った「こめっこ」参加者の紹介で,生後 4 か月から活動に参加した。初回参加の日,きこえない子どもたちと保護者がみんなで楽しそうに笑っている姿を見て,驚きを含めて「ホッとした」と涙した。5 か月の診断で重度難聴（105ｄB）が確定し,補聴器装用を開始した。母は毎回活動に一番乗りするほど熱心に参加し, 手話学習や他の保護者との交流を楽しんだ。B は参加当初からじっとろうスタッフの手話を見ていた。6 か月にはお座り,8 か月には人見知りが始まる等,心身共に順調な成長を示し,1 歳 1 か月で両耳人工内耳手術を受けた。1 歳台はスタッフの手話表現遊びを真似たり,手話で動物やキャラクターの名前を表現したりして遊んだ。2 歳の誕生日を迎えると,「これはイヤ」「自分でする」と,手話ではっきりと意思を伝えはじめた。その頃,自宅ですごすAが,お気に入りの絵本を自ら手話と表情で感情豊かによみ語ったことを,母は喜んで報告してくれた。2 歳半頃から聴覚活用が進んで,発声が徐々に明瞭になってきた。3 歳を直前に,母であれば聴き取れる発話に手話を交えながら親子の会話を生き生きと続けている。一方で,「こめっこ」にも楽しみに通ってくる。入浴や就寝前に人工内耳を外し,リラックスして母とその日の出来事を振り返る時間は,手話での会話を楽しんでいるという。

新版Ｋ式　P－M：94　C－A：97　L－S：100　全検査：97**

考察

A児,B児は共に重度難聴で,人工内耳手術の前にろう者に出会い,手話言語を自然習得してきた。同時に保護者も手話を学ぶことで,きこえの異なる親子間のコミュニケーションが可能となり,結果として愛着形成が確かなものとなった。さらに,手話言語の獲得は,聴覚活用による円滑な日本語習得にも寄与することが示された。

* 河﨑ら（2022）「聴覚障害乳幼児と養育者に手話言語習得を保障する支援（1）－その臨床心理学的背景と意義－」第 41 回日本心理臨床学会 参照

** 病院（耳鼻科）で日本語（口話）のみで実施された結果

＊本発表は,対象ご家族に了承を得ています。

キーワード,聴覚障害・手話言語・早期支援